

震災後のサキグロタマツメタの生息状況

福島県水産試験場 相馬支場

部門名 水産業—その他—アサリ

担当者 岩崎高資・和田敏裕・成田薫・松本育夫

I 新技術の解説

1 要旨

アサリの被害種であるサキグロタマツメタは、他県産や他国産の移植用アサリ種苗に混入していたものが松川浦で繁殖し、増加したと考えられ、その被害を防止するため、相馬双葉漁協松川浦支所ではサキグロタマツメタの成貝・卵塊の駆除を2004年から精力的に行ってきた。しかし、2011年の東日本大震災以降、松川浦におけるアサリ漁業は操業が自粛されているため、漁労作業中の駆除作業は行われておらず、震災後のサキグロタマツメタの生息状況は不明であった。

本研究では、漁業者が2014年8月～10月に行ったサキグロタマツメタ成貝・卵塊一斉駆除作業(水産多面的機能発揮対策事業)結果をもとに、漁業が休止した現状でのサキグロタマツメタの生息状況を把握し、今後の効率的な駆除作業やアサリ資源管理のための基礎的知見とすることを目的とした。

- (1) 駆除されたサキグロタマツメタの殻高組成は2峰型を示し、区1号漁場は平均殻高27.8mm、区3.5号漁場では29.4mmであった(図1)。震災前と成長速度が同様とすると、区1号漁場は2012年級が主体、区3.5号漁場では2011年級が主体と推定され、漁場間で年齢組成に差が見られた。また、震災前生まれの個体数は少なく津波によって減耗したと考えられた。
- (2) 卵塊駆除のCPUE(1人・1時間あたりの駆除重量)は、2012年～2013年に低く、2014年には震災前の2010年並となった(図2)。
- (3) 駆除された卵塊は震災前に比べ大型化したことから、駆除努力量の減少による孵出量の増加が懸念される(図3)。
- (4) 震災後に生残したサキグロタマツメタが再生産を行い、漁業休止による駆除量の減少(図4)によって震災後の生残が良好であったため、2011,2012年級が成熟年齢に達した2014年に卵塊の密度が急激に増加したと考えられた。
- (5) 殻高20mm前後の2012年級が各漁場とも多く、発生が良好であったアサリ2013年級を摂食する可能性が高い。また、駆除努力量の減少が津波により減少したサキグロタマツメタの増加に繋がった可能性が高いため、アサリ資源を保護・増大するためには更なる駆除作業の実施が必要と考えられた。

2 期待される効果

- (1) 漁業者によるサキグロタマツメタの駆除作業において有用な情報であり、作業の見直しや効率化が図られ、アサリ資源の保護・増大に繋がる。

3 適用範囲

漁業者

4 普及上の留意点

- (1) サキグロタマツメタの稚貝を手作業で駆除するのは大変困難であるため、稚貝発生を防ぐ卵塊の駆除を第一に考える必要がある。

II 具体的データ等

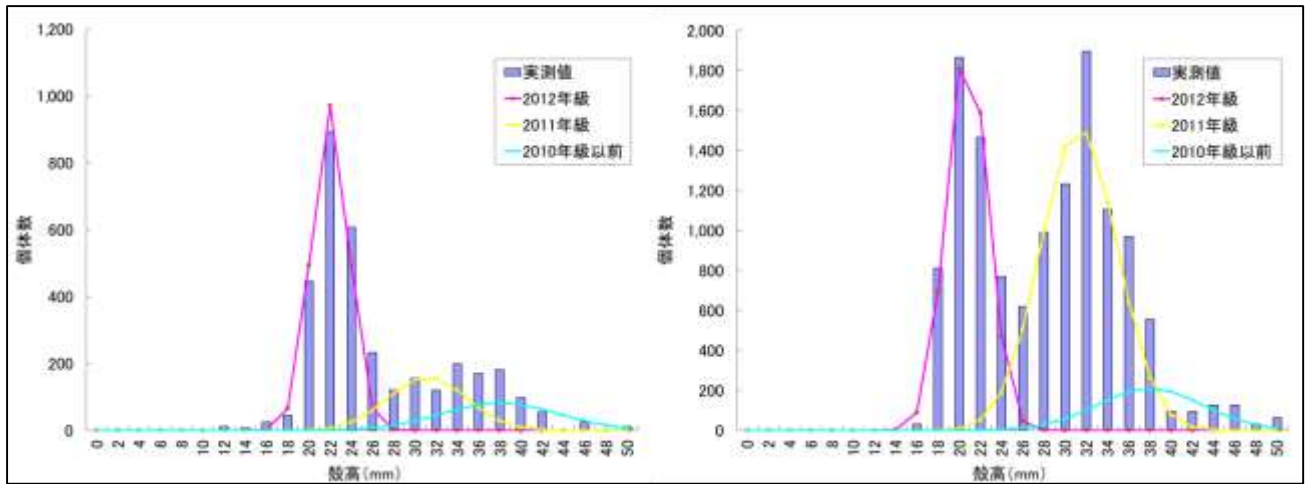


図1 成員の殻高組成 (左図：区1号漁場、右図：区3,5号漁場)

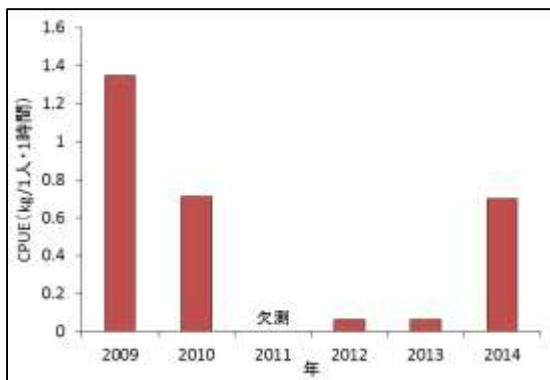


図2 卵塊の駆除作業の実態

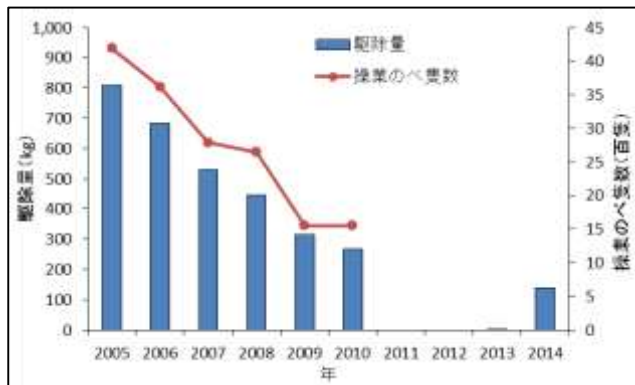


図4 成員駆除量の推移

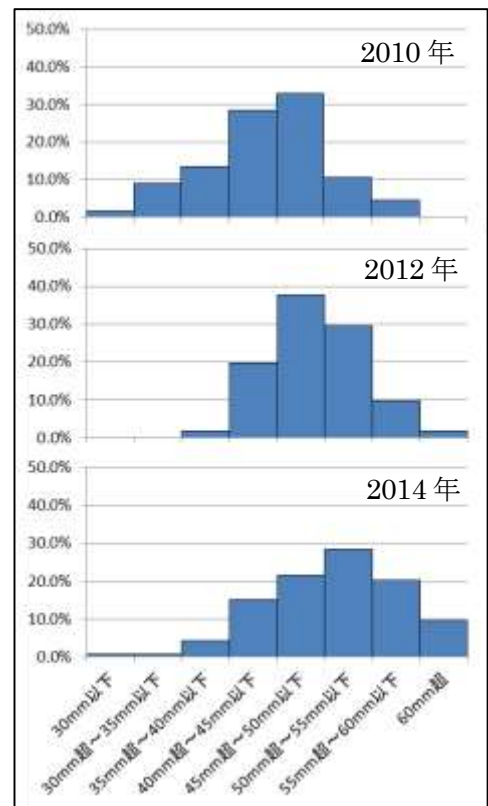


図3 卵塊の幅組成

III その他

1 執筆者

岩崎高資

2 成果を得た課題名

- (1) 研究期間 平成23年度～27年度
- (2) 研究課題名 松川浦の増養殖の安定化に関する研究

3 主な参考文献・資料

- (1) 平成16年度～22年度福島県水産試験場事業概要報告書
- (2) 海のブラックバスサキグロタマツメタ 外来生物の生物学と水産学